

(2) 不登校支援の充実をめざして

四万十市立中村中学校
谷崎 美佳

1. はじめに

本校は生徒数 428 名、学級数 14 学級(+知的 1 学級、情緒 2 学級)と、幡多郡の中では最も規模の大きい学校となっている。

本校が本格的な不登校対策に取り組むきっかけとなったのは、R2 年度にスタートした不登校担当教員配置校サポート事業の推進校となったことである。不登校担当教員配置校サポート事業をうけ、未然防止・初期対応の強化、校内サポートルームの運営など、様々なことに取り組んできた。そして今年度より取り組み始めた不登校対策プロジェクト事業では、前年度までの取り組みを継承しつつ、校内サポートルームの運営について大きく見直しを図った。本レポートでは、2つの事業を通して本校が現在取り組んでいる不登校支援についてまとめたい。

2. 具体的な取り組み

(1) 本校における不登校の実態

H30 年度からの不登校生徒数と出現率は右の通りとなっており、新型コロナウイルスが出現した R 元年度以降、厳しい状況が続いていた。R3 年度をピークに出現率は若干減少傾向にあるものの、依然として高い数値である。そこで、今年度は「不登校生徒の欠席を 1 日でも減らそう！不登校出現を 20 人に抑えよう！」をスローガンに、取り組みをスタートすることにした。

	H30	R1	R2	R3	R4	R5
1年生	4	2	7	10	4	7
2年生	7	4	5	8	10	4
3年生	5	7	5	6	10	10
全体	16	13	17	24	24	21
出現率	4.05	4.91	4.91	6.23	5.78	4.91

(2) 要因として考えられるもの

不登校の要因は多種多様で、生徒の数だけあると言えるが、昨年・今年の 2 年間の傾向を分析した結果、複数の生徒に該当していると考えられるものが以下の項目である。

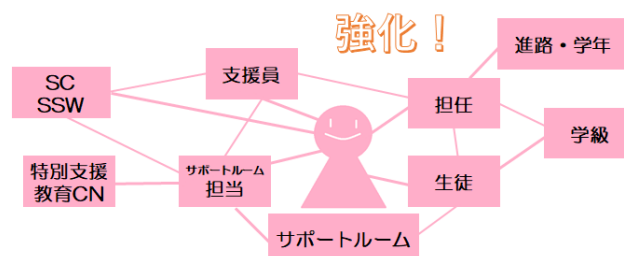
- ・昨年度から欠席が多い
- ・特性による不適応
- ・人間関係での悩み
- ・家庭背景
- ・昼夜逆転やゲーム依存
- ・低学力
- ・怪我や病気、インフルエンザ後
- ・学級や教師との関係
- ・小規模校からの進学または編入

複雑な要因で不登校状態になった生徒にどんな手立てができるか。また、不登校予備軍にある生徒を支えるための未然防止として、どのようなことができるか。日々、トライ&エラーを繰り返しながら支援方法を模索している。

(3) 現在の取り組み内容

①校内サポートルームの取り組み

- ・不登校支援について組織職員会等で周知。
- ・教員・支援員・SC・SSW と連携しての生徒支援。
- ・生徒の動線を配慮した教室配置。
- ・学習の個別支援とニーズに応じた ICT の活用。
- ・担任、学年、教科担当との接続強化。



主に上記の取り組みを行っているが、今年度特に力を入れたのが「担任、学年、教科担当との接続強化」である。校内サポートルームで学習する生徒も、出口は他の生徒と同様、高校入試である。高校入試に向かえる力をつけるために、3年団には進路を踏まえての関わりをお願いした。「進路は担任主導で指導してほしい」旨を学年会で共有し、学年主任や進路指導主事にも協力してもらいながら進路についての連携を図った。その結果、秋以降生徒の意識にも大きな変容が見られ、互いに教え合いをしながら

学習する姿が日常的に見られるようになった。

②不登校等生徒支援会議の開催

- ・四万十市教委、小・中学校、教育支援センターで定期的に会を設け、指定事業の内容やそれぞれの計画と具体的な連携の仕方、進捗状況を確認。
- ・計画的な校内支援会・情報交換会の設定。今年度から定期的な検証に重きを置き、取り組みを振り返る機会を多く設定した。また、サポートルーム担当、特別支援教育学校コーディネーター、SC、SSWなどで毎週金曜日に情報交換会を行い、具体的な支援について協議・共有を図っている。
- ・小中連携の強化

今年度は小中連携の方法について大きく見直しを図った。年間を通しての支援会への乗り入れや交流授業の参観などを通し、定期的に情報を交換し合うことで支援の必要な生徒を前もって確認することができた。また、支援会の中で小学校の具体的な支援内容を確認したり、中学校でも支援を引き継ぐことが可能かを話し合ったりすることで、小中の接続をさらに意識するようになったと感じる。

③「校務支援システム」等を活用した情報の共有

- ・「健康観察記録」と「気づき」の活用。

こまめな入力を職員会でお願いし、各学年で取り組んでもらっているが、「気づき」の活用はなかなか活性化していない状況である。不登校担当、特別支援教育コーディネーター、養護教諭、学年主任等がハブとなり情報をつなぐ形で生徒の情報共有は行えているが、効率面ではやや不便さを感じる。よい ICT の活用法を今後模索していきたい。

④教職員の不登校に対する認識と対応力の向上

- ・特別支援教育コーディネーターと連携し、校内研修を年間5回程度実施。演習やSCの講話、拡大支援会など研修内容を工夫。
- ・今年度より若年教員対象のOJTの中に不登校支援の内容を位置付ける。
- ・朝の挨拶運動や学年フロアでの見守り。
- ・組織職員会での不登校マニュアルの確認。

県教育委員会の訪問時に、自立支援の手立ては充実してきたので、次は未然防止の強化に努めてはという助言をいただいた。今年度、未然防止の強化にはチーム支援が必須であることを確認できたので、来年度にむけて具体策を考えていきたい。

演習 ~mission! 生徒の気持ちを聞き出せ!~

Aさんの様子に変化を感じたのは1週間ほど前でした。いつもクラスの中で大きな声で話しているAさんが、授業中一言も話さず机につぶして寝ているのです。心なしか、クラスの生徒たちもビリビリしているように感じます。そんな状態が月・火・水と続き、木・金とAさんは欠席しました。欠席理由は「腹痛」です。電話連絡で母親と話したときには、来週には登校できるということでしたが、翌週の月曜日もAさんは欠席しました。

問題 家庭訪問でAさんの気持ちを聞き出すには、どんなふう話をすればよいのだろうか?

⑤欠席状況の早期把握

- ・朝、各学級の副担任が出欠をファイルに記録し、その情報をもとに学年主任が欠席状況を職員室のホワイトボードに書くようにしている。遅刻や早退は対応した人が書き込む形にした。
- ・Tetoru（通信アプリ）の活用。

⑥ICTを活用した支援の充実

- ・グループウェアやTetoru、気持ちメーターの活用。
- ・サポートルーム生徒や教育支援センター内の適応指導教室に通室している生徒へのリモート支援。
- ・eライブラリやデジタル教材の活用。

（4）広島県視察の学び

広島県では、『学びの変革』アクション・プランと題し、すべての児童生徒の主体的な学びの実現にむけて様々な取り組みを行っているようだ。主体的に学ぶことは自己肯定感や自己有用感と深く結びつい

ているが、学校に来づらい・人と関わりづらいなど、主体的に学ぶ以前の困難さを抱えている生徒は少なくない。そこで、子供の実態に応じた多様な選択肢と自己決定の場を設けることで、主体的な学びの実現を目指すという方向に、県として動いているという。

視察では、不登校 SSR（スペシャルサポートルーム）推進校を 2 校と教育支援センターを見学させていただいた。スペシャルサポートルームや教育支援センターでの学びを通じ、「相談する力」「自分の強みを知り、生かす力」「苦手な場面で SOS を出す力」を育てるということを確認し、安心安全な居場所かつ個々の状況に応じて成長できる場所として位置づけ、取り組みを行っているようだ。教室復帰を前提としないことを県が打ち出していることも特徴的と感じた。

質疑・応答の中で教育センター長がおっしゃっていたことが印象的であった。「広島の実践はあくまで一つの提案です。全く同じことをどこでもできるわけではないし、予算の限界もある。広島の取り組みでよいと感じたもののエッセンスを取り入れて、地元での取り組みに生かしてほしい。」——幡多郡の環境の中では何ができるか。どこと繋がれば、私たち自身は何をすれば、子供たちの安心・安全・自己実現に一步近づくだらう。そんな視点で、不登校支援をチーム学校・チーム四万十で考えていきたいと思った。

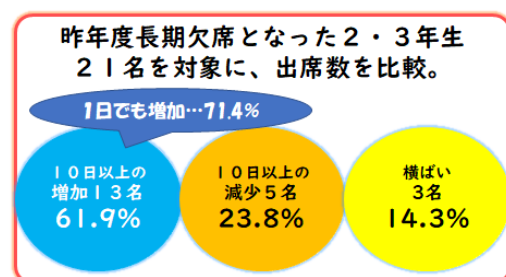
広島県スペシャルサポートルーム先進校視察 令和5年12月12・13日 広島県教育センター SCHOOL'S 府中市立第一中学校 尾道市立因北中学校	視察での学び—来年度に向けて ・サポートルームで付きたい力の協議 ・サポートルームの学びを評価に繋げる手立て ・個別最適な学びの探求と自己実現
---	--

(校内研での報告資料より抜粋)

3. 成果と課題、今後に向けて

サポートルームへ教科担当の先生に来てもらう時間を設けたことは非常に効果的だった。特にテスト前にテスト範囲の学習をしたことで、これまで定期テストを受けることができなかった生徒も受けることに繋がった。また、担任の先生もサポートルームに足を運ぶ機会を増やしてくれ、進路についての声掛けなどをこまめに行ってくれた。教室の動きが分かることが安心につながることを実感した1年だった。

支援員・SC・SSW と協力しながら生徒の状態をこまめに把握することで、その時々に必要な支援を行うことができた。心の波によって状態の良し悪しはあるが、学習時間が増加したり、授業の見学に参加できたりとよい変化が見られた。昨年度不登校生徒の出席数を R4 年 1 月末と R5 年 1 月末で比較すると、61.9%の生徒が 10 日以上出席増加となった。今年度学校の目標として掲げた「すべての不登校生徒の出席数が 1 日でも増加する」はまだ達成できていないが、71.4%の生徒が「1 日でも増加」となっている。



サポートルーム内の規律の徹底については弱さがある。誰もが過ごしやすいサポートルームを目指し、過ごし方のルールを見直していきたい。

4. おわりに

先日、校内研で広島県視察の報告をした際に、サポートルームで付きたい力と学習の評価に関して、チームで考えていきたいと提案した。今年度は担当が取り組みを考え、発信することが多かったが、サポートルームに繋がっていない低学力・無気力な長期欠席生徒への支援など、皆で知恵を出し合いたいことは多くある。中村中の強みは組織力である。来年度は基盤となる部分からチーム学校で考え、全教職員が自分事として不登校支援に取り組める形を目指していきたい。